

“Laudamus te”は宛て書き？

いよいよモーツァルトのハ短調ミサ曲 K427 の練習が始まりました。手許のCDでは英語のタイトルが”Great Mass”となっていますが、4月18日に演奏したばかりのバッハのロ短調ミサ曲に比べれば演奏時間は半分以下の約50分で、“Credo”は”Crucificus”以下の曲を欠き、“Agnus Dei”の楽章は全く書かれていないという、変則的な構成の13曲からなるミサ曲です。とは言え、モーツァルトの宗教音楽の中では「レクイエム」と並んで最も大規模な作品で、傑作であることは間違いありません。

今日は筆者がこの曲を聴く度に感じることの一つをお話したいと思います。それは第3曲”Laudamus te”のことです。軽やかな弦楽器の前奏に続いてソプラノが、まっ青に晴れ上がった5月の空のように明るく、輝かしく神を讃えるアリアを歌います。

ところで映画やドラマの脚本家が特定の俳優を主演に想定し、その人のキャラクターに合わせた台本を書く「宛て書き」が行われることがよくあります。ポップスの世界ではほとんどの新曲が「宛て書き」ですが、クラシック音楽でも作曲者自身や身近にいる名手のため、あるいは王侯貴族などのパトロンからの注文に応じるために「宛て書き」をすることが少なくありません。例えば主君であり、音楽の弟子でもあったプロイセンの王フリードリヒ二世のために、クヴァンツがひたすら書き続けたフルートの曲は「宛て書き」の典型といえます。モーツァルトも親友ロイトゲープのために4曲のホルン協奏曲を作曲しました。バッハの「ブランデンブルク協奏曲第2番」における超絶技巧のトランペットも、彼の周辺に名手がいればこそ彼のために書かれたものでしょう。

ハ短調ミサ曲の初演(1783年10月26日、ザルツブルク)にはモーツァルトの妻コンスタンツェが参加したことがわかっていますが、ソプラノの歌手であった彼女は、おそらく Sop.1 として”Laudamus te”を歌ったことでしょう。宗教曲としてはいささか能天気聞こえるこの曲は、ソプラノの声と技巧を最大限生かすように書かれています。モーツァルトは宗教性よりも演奏効果を重視したかのようなこのアリアを、結婚間もないコンスタンツェの為に書き下ろしたに違いありません。息子の結婚を喜ばない父レオポルトへの挨拶も兼ねて。

そのせいかこのアリアは、真摯で厳粛な雰囲気支配的なハ短調ミサ曲中でやや異彩を放ち、多少世俗的な匂いがするのはやむを得ないことかも知れません。もちろん文句なく美しい極上の一曲であり、「君の声は本当にきれいだから、とびきりのアリアを書いてあげるね」という、新妻へのモーツァルトの愛情が表れているような気がします。

【後記】

山田様とともに第9期の楽事を担当することになりましたテノールの新井です。よろしくお願ひ致します。こんな調子で次回演奏するバッハとモーツァルトの音楽について「ここがすごい、美しい、格好いい、泣ける、笑える(?)」と感じた点を気ままに書いて、団員の皆様のご覧に入れたいと思っています。気楽にお読みいただければ幸いです。

お気づきの点などありましたらお知らせ下さい、皆様のご意見をお待ちしています。